

パネルディスカッション

Panel Discussion

高橋 英之
Hideyuki Takahashi

大阪大学
Osaka University
takahashi@irl.sys.es.osaka-u.ac.jp

Abstract

Let's enjoy meaningful discussion!!

Keywords — Social application of human-agent interaction

1. はじめに

大学での基礎研究が社会に影響を与えるためには、企業の人たちとの間に良いコラボレーションが生まれることが不可欠である。今回のラウンドテーブルは、エージェント科学の分野において、このような大学と社会間のコラボレーションの創発を狙い、基礎研究側の招待講演者として、イエール大学の白土寛和先生、企業側の招待講演者と Panasonic の森川幸治氏を招いた。パネルディスカッション (図1) においては、この二人の先生に加えて、公募研究者の先生方も交え、大学で実施されているエージェント科学研究がどのように社会応用に結びつくのかについての議論を深めたいと思う。

これまで産学連携や異分野融合を掲げたシンポジウムは数多く開催されてきた。それらの催しにおけるパネルディスカッションでは、それぞれが自分の考えを述べあい、最後に今後も話し合いを続けていくことが大事だね、という誰も傷つけない予定調和的な結論によって議論が閉じられることが多かった。しかしこのような形式主義的なパネルディスカッションは、結局的には作業としてイベントをこなした関係者の間の満足感だけが残り、その内容は誰の記憶には残らないものが多かった。

エージェント科学はまだ未成熟なものであり、多くの人々が素をさらけ出して対話を続けていく中にしか、本当に意味がある価値は創発できないであろう。しかし我々が本当に意味のある議論を行いたければ、そして本気で新しいものを生み出そうとするのであれば、形式主義的議論やコラボレーションの呪縛を抜け出し、より建設的な本当の議論を行う必要がある。そのためには、パネルディスカッションの参加者がただ漫然と演題に座るのはまずく、それぞれが議論のリテ

ラシーをもつことが必要であろう。

2. 良い議論を行うリテラシーを

倉島らは良い議論を行う上での技術として、「伝達の技術」、「傾聴の技術」、「質問の技術」、「検証の技術」、「準備の技術」の5つを身につける必要を説いている [1]。例えば「伝達の技術」であれば、最初にロードマップを述べる、主張の項目を分かりやすく整理する、「傾聴の技術」であれば、相手の立場になって相手の主張の意図を理解しようとする、相手固有の納得の文法を理解しようと試みることである。

ただどのようにこれらの技術を駆使しても、結局お互いが感情的に相手を拒否していたら、どんなに相手がいいことを言っている、それを受けて自らが思考や発想を変えることは無いであろう。パネルディスカッションにおいて一番大事なことは、感情的にならないこと、余裕をなくさないことなのかもしれない。そのためには、あまり一つのことには囚われない余裕がある心を日ごろから養うことが大切なのかもしれない。例えば、適宜余暇をとり家族や友人と遊んでリラックスするなど非常に良い方法であると思うが、みんながみんな、幸せな家族や友人がいるわけではない。そういう人たちに余裕を与える上でも、メタ的な話になるが、エージェント科学には何か大きな可能性があるかもしれないと私見を述べ、筆をおくことにする。



図1. パネルディスカッションのイメージ

参考文献

- [1] 倉島保美, (2015) “論理が伝わる 世界標準の「議論の技術」 Win-Winへと導く5つの技法 (ブルーバックス)”, 講談社 (2015/5/20).